

森鷗外日記に見える柳田國男

—全集「柳田國男年譜」補遺—

竹居 明男

管見では、鷗外森林太郎

(一八六二—一九二二)の

日記『鷗外全集』第三五

巻所収、旧全集著作篇第

二〇・二二巻参照)に柳田國

男の名が計六箇所登場する

が、小田富英編『柳田國男全

集』別巻一の「柳田國男年譜」

(筑摩書房、二〇一九年刊)

には、これらに基づく記事は

採録されていない(同年譜卷

末の「主要参考文献目録」に

は「主要人物日記等」の項が

あるが、「個人全集収録日記

は除外」されており、『鷗外

全集』は見えない)。

付言すれば、苦木虎雄

『鷗外研究年表』(鷗出版、

二〇〇六年)には上記に基づ

く記事はすべて採録されてい

るが、小稿では、該当日記の

記事再録に簡潔な注記を施

し、僭越ながら「柳田國男年

譜」への補遺としたい。

以下、該当の記事は、柳田

國男に直接かわる記述(傍

線を付す)以外の記事も、記

主鷗外にとつての重みを推測

しうる点から、全文を再録し

た。「」内には全集第

三五巻の頁数を示し、原則と

して人名以外は新字体に改め

た。

①明治四十二(一九〇九)

年日記「三月一二日条

(四三二頁)

陰。時々雨ふる。道は稍乾

けり。大臣官邸に往きて事を

稟す。照内豊、宇山道碩来話

す。井上未亡人秀子太郎に供

へし香奠の返礼にふくさと茶

とを贈り来ぬ。柳田國男狼の

書を印行して贈る。裏門の傍

なる白梅咲く。千住の大工音

次郎父子来て湯殿を修繕しは

じむ。

*「狼の書」とは、言うま

でもなく『後狩詞記』である。

『年譜』の三月一日条に

「『後狩詞記』が出来てきた

ので、兄弟や森鷗外、河上肇

などに贈呈する本に献辞と署

名を書き入れる。」云々との

記事があり、早くも翌日には

鷗外のもとに届いたことが判

明する。

②明治四十三(一九一〇)

年日記「一〇月二四日条

(五〇一頁)

晴。永井壮吉来話す。妻立

ち寄る。大井憲太郎の書生長

谷川重郎に金五円を与ふ。柳

田國男来話す。大臣朝鮮より

帰りて始めて局長会議を開か

せ給ふ。

*永井壮吉は言うまでもな

く永井荷風。時間帯はずれた

と思いが、同日に柳田も鷗

外宅を訪問した。

③明治四十四(一九一一)

年日記「四月七日条(五二〇

頁)

朝より晴れて風少し。され

ど猶寒し。局長会議あり。柳

田國男来訪す。

④「大正二(一九一三)年

日記」三月一七日程(五八八

頁)

夜来春雨。柳田國男来て岡

村千秋の事を托す。其他雑話

あり。杏奴、類熱あり。本堂

恒次郎物を還す。鈴木本次郎

来て伊井荃峰が阿部一族を興

行せんとすることを告ぐ。

*この一週間前に創刊され

た雑誌『郷土研究』は、岡村

千秋方の郷土研究社から発行

された。柳田の縁戚にあたる。

⑤「大正三(一九一四)年

日記」四月二九日程(六二七

晴。冷。依知川敦(千葉)

の書を得てこれに復す。柳田

國男に書を遺る。午後局長会

議あり。大塚陸太郎の非行を

隠蔽せんとする運動盛なり。

明舟町を訪ふ。

*『研究年表』当該条で

は、直前の文章を受けて「柳

田國男にも出す。」と記すが

(返書のニュアンス?)、返

書ではないように思われるが

如何。

⑥「大正四(一九一五)年

日記」五月一八日程(六六一

頁)

晴。泰宮のつかせ給ふ日

なり。平井政通来て岩田一の

事を言ふ。高橋順太郎来て自

殺せし弟の事を言ふ。片山侍

医頭に祭典等の時の傷病者数

の事を調べて申し遣す。東宮

御所(三田三丁目より右へ)

に祝賀に往く。倉林國義来て

四国巡礼記を返す。乃ちこれ

を柳田國男に送る。

*倉林國義は未詳。「四国

巡礼記」も未詳。

はなはだ簡潔ながら、以上

をまとめると、次のような項

目が「年譜」に追加できるの

ではなからうか。事の性質

上、「柳田年譜」としては不

相応の立項も含まれている

が、あくまで私案である。

①明治四十二年三月一二日
条「森鷗外に贈呈した『後狩
詞記』が、鷗外の手元に届く。」②明治四十三年一〇月二四
日条「森鷗外邸を訪れて対話
する。」③明治四十四年四月七日条
「森鷗外邸を訪れて対話す
る。」④大正二年三月一七日程
「森鷗外邸を訪れて岡村千秋
のことを托し、雑談もした。」⑤大正三年四月二九日程
「森鷗外が、柳田宛の書簡を
投じる。」⑥大正四年五月一八日程
「この日、倉林國義が来て返
却した『四国巡礼記』を、た
だちに柳田に送る。」

(同志社大学名誉教授)